

る。品名と数量の記載が見られる。他に今回記載しなかった木簡は三点あり、内訳は、「有」が一六文字分記された習書木簡一点と、呪符木簡二点である。

本遺跡の帰属時期は、前述したように奈良時代末～平安時代中頃までと考えられ、自然流路から出土した木簡・人形・斎串・人面墨書土器などは、本遺跡が祭祀の場としての性格を有していたことを物語る遺物である。また、過去三年間の調査を通じ、広い範囲で祭祀関連遺物が出土したことは、本遺跡が一大祭祀場として古代越中国で重要な位置を示していたことを物語るものとも考えられる。

木簡の釈読は富山大学本郷真紹氏にお願いした。

9 関係文献

大島町教育委員会・富山県埋蔵文化財センター『大島町北高木遺跡』（一九九五年）

（高橋真実）

奈良国立文化財研究所編集

『平城京木簡一―長屋王家木簡一』

現在でも鮮明な記憶のある長屋王家木簡の出土は一九八八年のことである。平城京左京三条二坊一・二・七・八坪を占める邸宅内で、八坪の東南隅に掘られた溝状の土坑から三五〇〇〇点をこえる大量の木簡が出土したのであった。これまで概報の形で報告され、相当の研究が蓄積されてきているが、今回、その正式報告の第一冊が出版された。

今回の『平城京木簡一』は王邸内のいわゆる木簡溝から出土した木簡に、七五年・八〇年の発掘調査で、王邸の南側の「平城京左京三条二坊宮跡庭園」地域から出土した木簡を加えて、総計一六八七点についての原寸大写真による報告である。印刷は高精細印刷により、赤外線テレビカメラの画像も多く取り入れられている。

B4判 本文一五〇ページ

別冊「解説」付（A5判 三三六ページ）

定価 二九、八七〇円

発売 吉川弘文館